

幼保小連携・接続モデル実施園公開研修会 報告書【宮野木保育所】

日 時 : 平成31年2月14日(木) 9:30~11:45

場 所 : 宮野木保育所

参加者数

種別	園(校)数	参加人数
私立幼稚園(認定こども園)	2	3
公立幼稚園(認定こども園)	0	0
民間保育園(認定こども園)	7	10
公立保育所(認定こども園)	44	51
小学校	0	0
その他(大学・千葉県など)	1	1
合計	54	65



千葉市の幼保小連携・接続の取組(千葉市幼保支援課)

資料に基づき、千葉市幼保支援課から説明

モデル実施園の取組成果発表(宮野木保育所)

〈アプローチカリキュラム作成の工夫等(総括主任)〉

- 年長児の就学先は、例年と変わらず宮野木小学校、園生小学校、その他小学校となっており、今年度は11カ所に41人が就学予定。就学人数は宮野木小学校の方が多いが、子どもたちが行き来しやすい園生小学校に交流を打診した。
- 指導計画見直しにあたり、コーディネーターから宮野木保育所らしさを活かせると良いと助言を受け、所内で話し合いをした。保育者間の連携が取れており、そこが子どもたちにとって良い環境で保育できていることがらしさだと思う。
- 「千葉県版アプローチカリキュラム作成の手引き」を参考にし、月案の現状を総括主任保育士、年長担当保育士で見直しをした結果、子どもの姿から指導計画が立案されていないこと、指導計画を通して実際の保育とその経過が見えにくいことが課題であった。
- 課題をもとに、9月に月案の見直しをする際、子どもたちの経験がどのような育ちにつながっているか、10の姿を視点として付箋に書き出して整理をした結果、子どもたちの姿を通した具体的な月案の振り返りや反省につながった。様式自体も、5歳児のみの様式に変更をしたり、直接書き込みができるようにフリースペースを確保する等工夫した。
- コーディネーターから、子どもの経験や発言等を図式化することの重要性について助言を受けたことからウェブ図を試行した。
- ウェブ図作成にあたり記入内容等で疑問点が生じたことから、コーディネーターから助言を受け、「予想されるこどもの姿」、「保育者の配慮・環境設定」をあらかじめ記入したうえで、実践・振り返りと繋げてみた。
- 図式化、可視化することで、子どもの予想される姿を保育者間で共有でき、具体的な環境設定や保育の振り返りができるほか、保育者は子どもの思いを見とる意識が高まり、保育の質向上につながった。保育者が子どもの気持ちをとらえるツールとなった。また、可視化することで、保育のプロセスがわかりやすくなり、保護者へ保育者のねらいを伝え、説明できるツールとなった。

<実践例の紹介(年長担当)>

- 日々の保育の中で、他者の話をきけない子、自身の気持ちの切り替えが難しい子に対し、どのようなアプローチをするか保育者同士で話し合う中、「自立心」、「協同性」、「言葉による伝え合い」に保育者の視点を置いた。
- 運動会のリズム体操にあたり、一人の園児がやりたくないと話していたため、何故、この子はやりたくないのか、どのようにしたら自発的に参加できるかを考えながら保育にあたり、園児はやりたくないのではなく、うまくできない不安がある事がわかったため、少しずつ成功体験をすることで自信を高めるような保育を実践したところ、自発的に参加できるようになった。リレー遊びでは、当初は勝ち負けにこだわり、負けた時に悔しくて気持ちの切り替えがなかなかできない子が多く、保育者も負けて悔しい気持ちを受け止めるだけであった。
- コーディネーターから、自己決定の経験不足からセルフコントロールができていないと助言を受け、負けて悔しい気持ちを子ども自身が切り替えをできるように声掛けにするほか、どのようにしたらリレーで勝てるかを子どもたちで話し合いをすることで自立心や協同性、言葉による伝え合いの経験を積めるようにした。
- 子どもたちの話し合いを大事にするためには、保育者の「待つ」「見守る」「子どもたちに任せる」姿勢が重要となり、環境構成も子どもたちの姿に合わせたものを設定していくことが必要であることがわかった。
- 表現活動を例にすると、子どもたちが話し合いをする際、イメージを膨らませるツールとして文字に書き出すことで可視化され、意見の共有がしやすくなるほか、子ども自身が自分たちの取り組みに見通しが持てたり、自発的に役割分担ができるようになってきたりするようになった。時に他者とぶつかること、失敗することもあるが、他者と話し合う経験を通して思いやりや自信、友達と一緒にやるのが楽しいといった経験につながっている。

<小学校との交流(年長担任)>

- 小学校の生活科の授業を総括主任保育士、年長担当保育士で見学し、シャボン玉づくりの授業の様子を写真に収めてきた。卒園後4カ月程度経過したころの様子として、子ども同士の関わりができている反面、担任の話が始まっても集中できない子や、困った時に大人に助けを求められない子がいた。保育所と違い、関わる大人の人数が違うことも再認識した。
- 保育所に戻り、年長児に授業の様子の写真を見せ、どのような道具でシャボン玉を作っていたか話し合いをするなかで、子どもたちからシャボン玉遊びをやってみたいと意見が出たため、場所と時間を確保するために年齢別に実施した。
- 教職員同士の交流として、お互いの情報交換を実施。意見交換する中で小学校就学までに身につけたいこととして、時間に対する意識、困った時に発信できるように自分の意見を伝えられること、自分の気持ちをコントロールする力があると良いこと等がわかった。家庭生活の中で学ぶこともあることから家庭との連携が重要なため、保護者会で周知した。
- 小学校交流をイベントにしないため、ねらいを定めて交流を実施。1回目は「小学校で見てきたこと、感じたことを伝え合う」とし、小学校の校庭を見学、年長児からは、保育所にある物と同じでも大きさが違う、保育所には無い物が小学校にあると意見が出るほか、先生より大きい、友達3人分等、様々な表現をもって大きさや高さ、広さの比較をしていた。
- 2回目のねらいは、「小学校の校庭を散策したり、遊具等で身体を動かして遊ぶ」とし、校庭探検や遊具で遊ぶ中で、子どもたち同士で保育所にある物と比較しながら遊ぶ様子が見られた。小学校5年生との交流では、「小学生の話を聞いたり、質問したりして親しみを持つ」ことをねらいとし、事前に質問項目を話し合うほか、質問内容を紙に書き、先生や5年生に質問をした。就学に向けて興味関心が高まっていることから、意欲的に取り組むことができた。

○小学校に行って終わりにしないためにも、交流する「ねらい」を定めることが重要であるほか、交流前後の子どもたちの姿を丁寧に拾っていくことが次の意欲につながっている。

<保護者支援(総括主任)>

○今までも、壁新聞やクラス通信、懇談会等を通じて保護者支援を行ってきたが、保護者へねらいが伝わっていなかった。保護者は、知識や技術を子どもに教えてほしいと思っており、遊びを通して主体的に学ぶ重要性の認識が希薄ということが分かったので、10の姿を通した子どもの育ちを、写真やエピソードを加えながら保護者に伝える方法を取り入れた。

○小学校交流の様子を壁新聞として掲示したところ、親子で話しながら見る様子が見られた。保育のねらいと子どもたちの学びを伝えることで、保護者に協力者になってもらえるほか、家庭生活の重要性も認識してくれていると思う。

<モデル園としての実践振り返り(総括主任)>

○アプローチカリキュラム作成に取り組む中で、年長児後半になったから作成に取り組むのではなく、各年齢において、「今、どのような関わりが必要か」を保育者一人一人意識し、丁寧に関わりを継続することが大事だと感じた。年長児を通して各年齢に波及し、保育者の質向上につながっていると思う。

○様式も振り返りがしやすくなるようにフリースペースの確保をしたほか、ウェブ図といった図式化、可視化するツールを使用することで、子どもの姿を予想した具体的な環境設定ができたことにより、実践後の具体的な振り返りができ、次月の環境設定につながっている。

○小学校交流では、少子化の影響もあり、年上との交流や、小学校の登下校の様子を知らない子どもが増えている。小学校交流を通して、年上から優しく相手をしてもらうことができ、他者との関わりを経験できた。この経験を日々の保育にどう展開していくかが今後の課題。

○小学校は教科的な教育、学びであり、幼児教育の遊びを通した学びは保育所時代しかできないことを再認識した。現在できることをたくさん経験し、子どもたち自ら「相手に伝えたい」「相手の話を聞きたい」と意識できるようにしていくことが大事。

○モデル実施園の取り組み期間のときだけではなく、5年、10年と引き継いでいく為にも、小学校との交流、教職員同士の交流を継続するほか、保護者へ見える保育を提供して理解を深めてもらうことが大事。モデル実施園として大きく保育内容を変えたわけではない。次年度以降も質の高い保育をすることで、子どもたちが様々な経験を積み重ねていけるようにしたい。

近隣小学校からのお話(宮野木小学校)

【校長 網野先生】

○担任時代は、6年生を担当することが多く、1年生は1回あった。当時を思い返すと、6年生は言葉で説明することで理解していたが、1年生はそうではなく、戸惑った記憶がある。本日の発表を聞いて、小学校の生活科と同じことを保育所でも実施していることを知った。

○今までの保育所交流は、小学校を知ってもらうこと、1年生に年下の事関わってもらうことがメインであり、イベント的であったと感じるところもあった。

○小学校は教科として1年間に習熟すべき目標があり、子どもの実態把握が必要だが、保育所でも実態把握をしていることが理解した。小学校はどうしても先の中学校を見据えてしまう。発表を聞く中で、保育所の配慮が丁寧であることを知った。

○小学校では様々なイベントがあるので、保育所の子どもが来るのは難しくても、職員だけでもいいのでいつでも来てほしい。

○保護者への周知が難しいと感じているのは小学校も同じ。本校の特徴である長い歴史について掲示をしたが、小学生でも興味を持ったのは数人だった。しかし、掲示しなければ数人すら興味を持たないことを教員には説明し、環境設定の必要性を伝えている。

【教務主任 奥江先生】

- 校長から話もあったが、保育所交流はどうしてもイベント的になっていた。
- 今回のモデル校としての交流を通して、授業や施設の違い、保育所での保育を経験させてもらうことができた。交流にあたっては、5年生だけではなく、他学年も交流をしたがっていた。
- ウェブ図や指導計画は小学校教育にも生かせるものであるので参考としたい。

カリキュラムコーディネーターからのお話(千葉大学教育学部 教授 富田久枝先生)

- 夏から個別支援を開始したが、小学校の先生が保育所での会議に膝を突き合わせて参加するのは画期的であった。小学校側の理解に感謝する。また、交流にあたって、まずは保育所職員が昨年卒園した子どもを見に行き、成長を確認したのもよい視点だと思う。
- 千葉市のアプローチカリキュラムは、新しい物を作るのではなく、各園が今使用している月案を見直すといった視点であり、とてもよいことだと思う。
- 10の姿や要領、指針の改訂は、小学校側から見ると幼保でも教育を実施していることがわかり、10の姿を通じて共通言語化できるツールである。到達目標ではない。
- 宮野木保育所では、付箋を使用しながら保育所全体で改善する姿勢が見られたことが良い点。学びの物語を可視化で来ており、どのような学びをしているのか壁新聞を通して保護者や園児、保育者が共有できた。様式も振り返りがしやすくなるように改訂をしており、次月の月案に行かせる内容となった。宮野木保育所の改善意識は素晴らしい。
- ウェブ図を作成することで、子どもの思いを見とり、具体的な環境設定や予測する力が身についていく。宮野木方式でなくても、各園独自で実施しやすいフローチャートや図式化することで保育を可視化すると良い。各園ができることから実施してほしい。
- 一人一人の個別の支援も大事だが、集団生活、子ども同士で関わりができる今の時期、今だからこそできる経験を大切にしてほしい。

《アンケート結果》

1 参加者情報(アンケート記入者)

私立幼稚園 (認定こども園)	民間保育園 (認定こども園)	公立保育所 (認定こども園)	小学校	その他	合計
2	9	50	0	3	64

2 公開研修会の内容について

- ①大変参考になった ②参考になった ③あまり参考にならなかった ④参考にならなかった ⑤どちらともいえない ⑥未記入

	①	②	③	④	⑤	⑥	合計
千葉市の幼保小連携・接続の取組み	44	15	0	0	4	1	64
モデル実施園の取組成果発表	54	5	0	0	4	1	64
近隣小学校からのお話	42	16	0	0	4	2	64
カリキュラムコーディネーターからのお話	46	10	0	1	3	4	64

3 公開研修会全体について(理解の深度)

①そう思う ②まあそう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない ⑤未記入

	①	②	③	④	⑤	合計
幼保小連携・接続への理解	58	6	0	0	0	64
取組みにおける理解	52	11	0	0	1	64
カリキュラム作成・見直しの参考	58	5	0	0	1	64

4 最も印象に残った内容／カリキュラム作成・見直しにあたり参考になった内容(抜粋)

- AC 作成にあたり千葉市の考え方やポイントを知ることができ、自園で作成する上での大きな参考になった。
- 指導計画に振り返り等の記入し、次月に活かされるものとしていることを持ち帰り伝えていきたい。
- カリキュラムの振り返りがしっかりされていないことが問題点だということに気付かされた。PDCA の意識を持ち、振り返り、再構成が行うよう用式を見直していきたい。
- ウェブ図に取り組んできたが記入する際に悩んだりすることもあった。予測できる子どもの姿や保護者の思い、ねらいも記入することによって、より保育の進め方が明確になり、自分自身のねらいもしっかりと持てるようになるというところがとても参考になった。
- 小学校との職員の話合いの場が実現されているのはすごいと思いました。指導計画は作って終わりとなってしまい見直すことがあまりないと感じていたので、フリースペースやウェブ図の活用など参考になったものがたくさんあったので取り入れていければと思います。年齢別の計画であるのも分かりやすく良いと感じました。
- 小学校との交流回数が多く、とりかかりは始める時期が早い→小学校就学にむけて子どもに必要な力が具体的に示していける、見つかるという流れは、今後参考にしたい。
- 宮野木保育所ならではの特色、職員同士の連携を通してACに取り組んでいる姿が印象的であった。ウェブ図を活用して広い視点からの取組み(活動)の方向性を決めていくということが勉強になった。壁新聞では、見出し、写真、文章、工夫されていて、活動の内容がよく伝わってきてとても参考になった。
- 指導計画の見直し、振り返りができていないという反省が自分の保育所でもでているので参考にしたいと思った。小学校との交流は昨年度よりは増えているが、保育者による見学なども取り入れていけたらよいと思った。
- 小学校への興味を深められるよう、次にいく際の楽しみになるように質問を考えるなど、ねらいをもって単にお客様とならないような関係を築きたい
- 子どもの意見の「見える化」をすることで、子どもにも保護者にも伝わる、伝えることができることが最も参考になった。予想される子どもの姿から、環境も考え、作り上げ、実際に反省に活かすことができること、現状の子どもの姿を大切に見極めることの必要性を学んだ。
- 今あるものを活かして見直し活用するというのは、すぐに取り組んでいきたい。かべ新聞にも現在取り組んでいるが、今後は子どもが参加したりコメントをもらうなどにも取り組んでみたいと思った。

5 研修会全体に対する意見・感想(抜粋)

- 研修会の時間について所外での研修へ参加しやすいと感じた。午前中ではありますが半日は良いです。当日のスケジュールが事前にわかっていたら有難いと思った。
- 保育の取組みだけでなく、小学校の先生方の話を聞いたことはとても貴重であった。
- モデル園として1年を通じてアプローチカリキュラムの実施がされていて本当にすごいと思った。保育所だけだったり、小学校だけだったり、消極的であったら成り立たない成果だったので感じた。双方ともが連携に前向きだったからこそ何度も交流を持てたり、保護者の方が子どもに必要な力を再確認したり認識したりできたのだと思った。保育所に実践を持ち帰り、何だったら自分の保育所で行っていきけるのか考えていきたい。